

幼児期の仲間関係に関する研究の動向

教育創発学コース 高 櫻 綾 子

Review of Studies of Peer Relationships in Early Childhood

Ayako TAKAZAKURA

This paper reviews studies of peer relationships in early childhood and examines the relation between play in young children and peer relationships. First, it focuses on playgroup entry and intimacy with peers to examine the influence of peer relationships on play. Second, it considers the influence of play on peer relationships. The results show that there is a reciprocal relationship between the two: the success of a child entering a playgroup depends on the quality of peer relationships, and intimacy with peers is formed through play. Consequently, not only research but also the practice of teachers is required to bring about the mutual development of play and peer relationships.

目 次

- 1 章 問題と目的
- 2 章 幼児期における仲間関係と遊びの相互関係
 - A. 仲間関係が幼児の遊びに与える影響
 - 1. 仲間入りに着目して
 - 2. 二者間の親密性に着目して
 - B. 遊びが幼児の仲間関係に与える影響
- 3 章 まとめと今後の課題

1 章 問題と目的

仲間関係とは“仲間との相互作用の積み重ねによって築かれ”¹⁾、“園生活での現実を構成している”²⁾同年齢他者との関係である。特に複数の同年齢他者が存在する保育園や幼稚園では、子ども自身が主体的・選択的に仲間関係を形成するため、これを支援し促進することは保育実践における重要な課題として位置づけられている。また仲間関係を育むことは“広く対人関係、社会に関する知識の基礎を構成するのに役立つ”³⁾ことから、これまでに多くの研究が行われてきた。

幼児期の仲間関係に関する先行研究は、「仲間関係の形成に必要とされる社会的認知能力の獲得を検討する研究」、「仲間となっていく過程を追う研究」、「仲間同士の相互作用を分析する研究」に大別される。なかでも「仲間同士の相互作用を分析する研究」は多く、ソ

シオメトリック法を使用した集団レベルでの分析により仲間と認定した子ども同士の行動の特徴を検討している。その一方で「仲間関係の形成に必要とされる社会的認知能力の獲得を検討する研究」は、個人レベルの分析が多く、「仲間となっていく過程を追う研究」では、二者間レベルにおける事例研究が行われている。

そこで本稿では仲間関係を「同年齢他者との相互作用によって築かれる関係」と捉えた上で、相互作用のレベルにより、二者間(図1の1)、集団内(図1の2)、相互作用が上手くいかない場合(図1の3)に大別し、幼児期の仲間関係に関する研究の概略(図1)をまとめた。

二者間レベルの相互作用を扱う研究(図1の1)では、二者関係の形成について「子どもたちがどのように仲間を理解していくのか」という視点から検討を行っている。たとえば岩田・福田(1995)は、子ども同士のやりとりで見られる拒否の発話に着目し、その違いをもとに幼児が相手をどのように理解しているかについて分析した結果、3歳児が時期を追うにつれて直接的拒否から間接的拒否を用いるようになることを示した。また変化の理由については、やりとりをしている相手と一緒に遊ぶ仲間として捉え始めることで、遊びを崩壊させない可能性の高い間接的な拒否を選択するとしている⁴⁾。

一方、柴坂・倉持(1998)は、一人の女兒を対象児として選定し、個々のクラスメートとの相互作用について長期的な変化を分析した結果、対象児が2年間の園

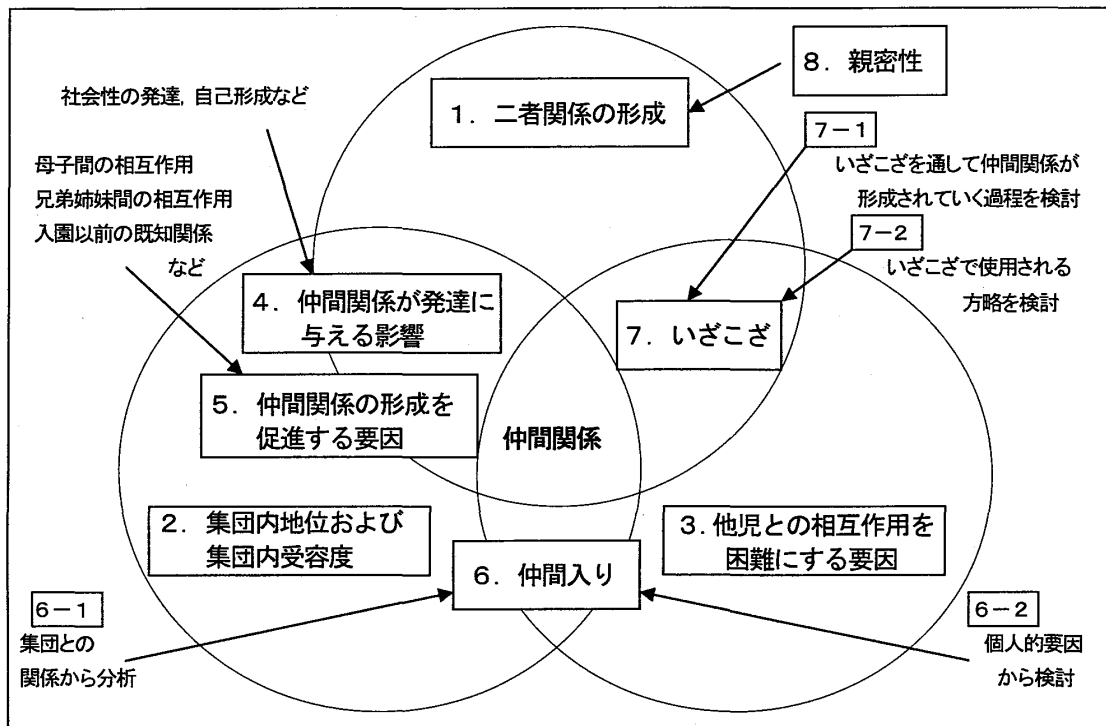


図1 幼児期の仲間関係に関する研究の概略

生活の中で、どの子どもに対しても同じ程度に関わるのではなく、“安全基地となるようなクラスメートを持つ”²⁾ことを明らかにした。この結果からは、“二者関係の性質は一様ではなく、相手を知るといような友だち関係を築く基礎となる時期があり、時間の経過とともに相手によって絆の強弱がみられるようになる”⁵⁾という、親密な二者関係の形成が示唆される。よって本稿ではこの二者間における親密性について図1の8に分類し、次章にて検討を行うことにする。

一方、集団レベルでの相互作用を検討する研究(図1の2)では、主にソシオメトリック法を用いた分析により、集団内地位や集団内受容度の獲得過程が検討されてきた⁶⁾⁷⁾⁸⁾⁹⁾。たとえば仲間関係の発達について、仲間内地位や接触パターン、対人文脈との関連で分析した原野ら(1991)は、時間の経過と共に相互作用数は増加し、特に同性の仲間との相互作用が増すことを明らかにしている⁶⁾。また人気児と拒否児がともに、同じ仲間との相互作用が多いとの結果を示したことから、“働きかけの内容が人気児、拒否児という仲間内地位を形成している”⁹⁾可能性を示唆している。

では、どのような働きかけの内容が集団内における地位の高低を左右するのだろうか。この点について中澤(1992)は、幼稚園への入園を機に、初めて経験する集団内において地位(人気)を確立していく過程に着目し、その要因となる行動と認知能力の役割について検

討を行っている。その結果、入園初期の行動が幼児の仲間に対する評価の基盤となることが明らかとなり、ポジティブな相互作用が多い程、集団内において高い社会的地位評価を受けることが示された⁷⁾。ただし初期に得た対人評価は永続的に続くものではなく、“ネガティブな相互作用が多いものは長期的には人気が低下する”⁷⁾と指摘している。

同様の結果は、幼児の遊びたい仲間を決める要因を検討した原野(1991)からも得られており、初期には、やさしさを感じる程、遊びたいという好意につながりやすい反面、時間の経過につれて、単に自分を受け入れてくれるやさしさだけでなく、頑張ってものごとをやり遂げるなどの目的遂行能力の認知が好意を抱く上で大きな要因となることが示されている⁸⁾。

また、同性(男児)の友達集団における優勢順位が個人行動と成員間の関係に及ぼす影響については、“優勢順位が集団内の社会的行動を制御する働きは3、4歳ごろすでに現れ、集団全体の活動は優勢順位の上位者を中心に行われる”⁹⁾ことが明らかにされている。

以上より、初期行動が対人評価の基盤となり、集団内での受容度や地位の獲得に影響を与える一方、集団の構成自体も同性同士へと変化することが明らかである。しかし仲間関係の形成初期における対人評価や集団内の地位は、“親密度の高い二者関係が優勢順位の変遷を促す”⁹⁾など、その後の相互作用により変容す

る可能性も大いにある。また相互作用自体がどのように開始されるかによって、その後の仲間関係の形成に影響が生じることも予想される。そのため本稿では、相互作用開始の1つの契機として「仲間入り」(図1の6-1及び図1の6-2)を取り上げ、次章で検討を行うことにする。

これまで二者間あるいは集団内において相互作用が行われることを前提に述べてきたが、実際の保育現場においては相互作用開始以前の問題も生じている。そのため先行研究では、同年齢他者との相互作用自体に困難を覚える子どもを「拒否児」「排斥児」「周辺児」と称し、主に引っ込み思案などの個人特性や社会的スキルの観点から検討を行ってきた。しかし他児との関わりが困難である背景には、“いわゆる“キレる子”など自分の感情や行動をコントロールすることができない”¹⁰⁾場合もあれば、家庭内の不安定な状況が反映される場合¹¹⁾、さらには外国籍児を取り巻く問題¹²⁾もある。また同年齢他者との関わりが困難な幼児は、“一見すると何もしていないように見える場合もあるため、ネガティブな方向に捉えられやすいが、自らの興味や関心、遊びへの動機を1人でも十分に満たしている場合もある”¹³⁾。そのため長期にわたる観察をもとに、同年齢他者と関われない子どもの特徴を描き出し、他児との関わりを支援する保育のあり方が検討され始めている¹¹⁾¹³⁾¹⁴⁾。そこで本稿では「他児との相互作用を困難にする要因」(図1の3)としてまとめた。

たとえば畠山・畠山・山崎(2003)は、引っ込み思案児が示す特徴の1つである、1人遊びについて、“1人遊びにおいて課題を真剣に遂行することが、同様の1人遊びを行う他児の課題遂行に対して興味を喚起する効果があると同時に、同様の遊びを行う幼児と場所を共有すること(平行遊び)によって、相互作用を行うきっかけをつかみ、それが社会的スキルの学習へとつながる”¹⁵⁾と指摘している。また倉持・柴坂(1996)は、仲間との関わりに問題を抱えている子どもであっても、“周囲にたくさんの友達がいる開いた状況”¹¹⁾を有する園生活においては、他児や保育者との遊びを中心とした関わりを通じて改善する可能性が高いことを示している。さらに“一人で見えるように見えてもなかよしは存在する”¹⁵⁾との指摘もある。よって今後は、一人遊びなど、これまで同年齢他者との相互作用において重要視されてこなかった要因についても見直し、保育実践に生かす必要があると考える。

また二者間、集団レベルでの相互作用の双方に密接に関連するものとして、「仲間関係が発達に与える影

響」(図1の4)と「仲間関係の形成を促進する要因」(図1の5)が挙げられ、個人レベルと併せた検討が行われてきた。その結果、仲間関係が発達に与える影響を検討する研究(図1の4)では、仲間関係が社会性の発達¹⁶⁾¹⁷⁾だけでなく、自己形成¹⁸⁾にも影響することを明らかにしている。その一方で、仲間関係の形成を促進する要因を分析する研究(図1の5)では、母親・兄姉との相互作用経験や入園以前の既知関係が就園後の仲間との相互作用において有効に働くかを検討している¹⁹⁾²⁰⁾²¹⁾²²⁾²³⁾²⁴⁾。こうした研究からは“子供の遊ぶ力の発達には、遊びの中での母の十分な関わり、3歳前のPeer遊び体験が重要である”¹⁹⁾と示唆される一方、入園前の友だちの数と入園後の対人行動との関連はあまり見られないとの結果も示されている²³⁾。また兄弟姉妹関係についても“きょうだい経験が多いほど攻撃性は高い”²¹⁾という結果がある一方、“年少のきょうだいをもち年少児と接する機会の多い幼児は、日常生活の中で年少児との共同作業の際の有効な援助の方法を学習しており、その結果適切な援助を行うのに対し、年少のきょうだいを持たない幼児は、年少児との生活経験の不足から作業の遂行のみに注意が奪われ、年少児に対する考慮に欠ける傾向を示す”²²⁾との結果もある。よって今後これらを包括するような研究が待たれるが、こうした結果からは仲間との相互作用が母子間や兄弟姉妹間での相互作用と共通する知識によって成立する部分と、“仲間と自分の関係についての新しい知識を身につけていく”³⁾ことで成立する部分という両方の特徴を持つものであることが示唆される。言い換えるならば、母子間や兄弟姉妹間で経験したことの無い相互作用を経験することに仲間関係の意義があると言えるよう。

最後に、幼児期の同年齢他者との相互作用内で生じることの多い、「いざこざ」について述べる。いざこざは、図1に示した二者間レベル以外に集団レベルにおいても生じるが、幼児期においては、まず二者関係において“いざこざが成り立ち、それがいざこざとして展開するための条件”²⁵⁾が獲得された上で、集団レベルへと発展すると考えられるため、本稿では図1の7に分類した。先行研究では、いざこざを通して仲間関係が形成されていく過程²⁶⁾(図1の7-1)や、いざこざで使用される方略²⁵⁾²⁷⁾²⁸⁾²⁹⁾³⁰⁾³¹⁾(図1の7-2)に着目した分析が行われており、“いざこざは、自己の発達や社会的認知能力や社会的技能の発達と密接に関連している”²⁷⁾だけでなく、いざこざの発生理由や解決方略は年齢や時期によって変化が見られることが明らか

にされている²⁵⁾。特に物の所有を巡るいざこざでは、相手との関係により使用される方略が異なると指摘されている²⁶⁾。その一方で、いざこざにおける情動調整と仲間関係との関連も検討されているが、この点については森田(2004)にまとめられているので本稿では割愛する。

以上のように、幼児期の仲間関係に関する先行研究は分析レベル(個人、二者間、集団)や研究方法(質的、量的)は異なりつつも、多角的かつ多岐にわたって研究が行われている。そのため図1に分類した研究やその研究から得られた知見については独立・分岐したのではなく、相互に補完しあうものと言える。

ただし先行研究においては問題も残されている。すなわち、多くの先行研究では分析場面の1つとして遊びを設定しているものの、仲間関係と遊びそれ自体の相互関係については十分な検討を行っていない。しかしながら、幼児間の相互作用は遊びを通じて行われることが多く、仲間関係の形成・維持に必要な“社会的スキルの学習と仲間との遊びは相互循環的である”¹³⁾ことから、幼児期に仲間関係が形成されていく上で遊びが果たす役割を軽視する訳にはいかない。

よって本稿では、先行研究を概観し、幼児期における仲間関係と遊びの相互関係について検討することを目的とする。具体的には、まず一緒に遊び始めるための契機である「仲間入り」(図1の6)に着目した先行研究を取り上げる。次に幼児期の仲間関係は、二者間での関係形成を基盤とした上で、集団内での相互作用に発展していくと考えられることから、二者間に「親密性」のある特別な関係が形成されることに着目し(図1の8)、親密さの違いが仲間関係だけでなく、遊びにも影響を及ぼすのかを検討する。そして最後に、幼児期の遊びに関する研究に着目し、そこに描き出された他者との相互作用を検討することで、幼児の遊びが仲間関係にどのような影響を及ぼすかについて示唆を得たいと考える。

尚、仲間関係には普遍的な発達の側面がある一方で、文化差による影響を受ける面も多いため、本稿では国内の先行研究に限定したレビューを行うものとする。また研究者間での一致した定義による区別がなされないまま、幼児の関係性について「仲間」「友だち」「仲良し」など、様々な用語で表現されている現状を踏まえ、本稿では先行研究の内容を引用する場合を除き、幼児の関係性を「同年齢他者」と表記する。

2章 幼児期における仲間関係と遊びの相互関係

本章では、遊びに対し仲間関係がどのように影響するのか、逆に、遊びが仲間関係にどのような影響を与えるのかといった、仲間関係と遊びの相互関係について検討を行う。そして最終的には、遊びを支援することで、同年齢他者と上手く関われない子どもの相互作用に変化をもたらすことが可能であるかについて検討する。

A. 仲間関係が幼児の遊びに与える影響

1. 仲間入りに着目して

遊びが生活において大きな位置を占める幼児期には、一緒に遊ぶことで同年齢他者との関わりを深めていくことから、他児や遊び集団との相互作用開始の契機となる「仲間入り」が注目を集め、集団との関係(図1の6-1)³²⁾³³⁾³⁴⁾³⁵⁾や個人的要因(図1の6-2)¹¹⁾³⁶⁾³⁷⁾³⁸⁾にそくした研究が数多く行われてきた。

たとえば倉持(1994)は、仲間入り側と遊び集団側での展開している遊びに関する情報の伝達に着目し、遊び集団への統合過程を検討した。その結果、仲間入り当初は、遊び集団側から仲間入り側への情報付与が多く、仲間入り側はその情報収集を行うのに対し、遊びが展開していくに従って、遊び集団側と仲間入り側双方が遊びに関する情報伝達にほぼ同じように関わるようになることを見出した³²⁾。

また仲間入りをはじめとする相互作用のきっかけについては、松井ら(2001)によって、仲間の模倣をしながら一緒にいる状態(3歳1期)から、相手の活動に対する暗黙的方略による働きかけが増加し(3歳2期)、「いれて」「いいよ」という定型的な仲間入りルールなどの明示的方略を多用する状態(4歳2期)へと変化することが明らかにされている³³⁾。さらにこの方略の明瞭さ(不明瞭さ)が仲間入りに及ぼす影響については、倉持・柴坂(1999)により、使用される方略が明瞭さを増すことでトラブルの発生率が減少すると指摘されている³⁵⁾。こうした結果からは、仲間入りの際に使用される方略が年齢に伴い発達することにより、仲間入りが成功する可能性も高まることが示唆される。

しかし仲間入りには、使用される方略だけでなく、幼児間の対人評価も影響すると考えられる。この点について倉持・柴坂(1999)は、“集団形成初期には、仲間入りを試みる子どもが遊び集団の遊びたい子か、遊び集団が即座に受け入れるか否かに決定的でなく、

むしろ仲間入り側が最初に取りの方略が成否に関連するのに対し、年少2、3学期以降、遊び集団側は遊びたい子が仲間入りを試みると即座に受け入れ、そうでない子では入れようとしなくなる³⁵⁾ことを明らかにしている。

以上より、“仲間入り方略の効果は子どもたちの生活する集団が集団形成のどの時期にあるかで違う³⁵⁾”と言えるが、一緒に遊ぶことが多く、特定の遊びが盛んに行われているような場合には、「いれて」「いいよ」などの明瞭な方略による仲間入りを必要とせず一緒に遊び始めることもあると考えられる。そのため保育実践においては、「いれて」などの仲間入りを可能にしやすい方略を教える一方で、たとえ仲間入りが上手いかなかったとしても、遊びそのものを育てることにより、逆に仲間入りや他児との相互作用について学べる場を保障することが重要であろう。

また図1に示したように、仲間入りについては個人的要因に焦点をあてた検討も行われている。特に仲間入りが上手いかない幼児については、その能力や個人特性のみに原因を求めるのではなく、二者間や集団との関連を踏まえた研究も行われている¹¹⁾³⁶⁾³⁷⁾³⁸⁾。こうした研究からは、仲間入りが上手いかない幼児について、仲間入りの際に必要な意図の解釈や方略に関する知識に問題があるのではなく、“実際の仲間入り場面において認知が正確に行えず、方略も知識どおりに使用できないことに原因がある³⁸⁾”と指摘されている。さらに仲間入りを始め、同年齢他者との相互作用に困難を覚える幼児の変容がその子どもを取り巻く他児や保育者を含めた関係性全体の変容を促すとの結果も得られている³⁶⁾。

しかし仲間入りにはそもそも「仲間に入りたい」「あの子と一緒に遊びたい」という感情が前提となる筈である。また展開されている遊び自体への興味が仲間入りを促す要因になることも考えられる。さらに現実には仲間に入れてもそのまま一緒に遊び続けることが出来ずに遊び集団から外れてしまう幼児もいる。こうした点について先行研究では十分な検討を行っていない。そのため今後、仲間入りに関する研究においては、その場で展開されている遊びや「一緒に遊びたい」といった感情がもたらす影響など、遊びとの関係を含めたさらなる検討が望まれる。

2. 二者間の親密性に着目して

二者間の親密性に関する先行研究では、自然観察³⁹⁾⁴⁰⁾や仮想実験⁴¹⁾を用いた分析が行われている。ま

た二者間における親密性の有無については、子ども同士の交渉回数の多さや時間の長さ、あるいは子どもに好きな子や仲の良い子を尋ね、それと実際の対人行動を併せたソシオメトリック法の使用により、事前にペアを設定し、他とは異なる相互作用や行動の特徴が見出されるか否かによって判断されてきた。

たとえば本郷(1996, 1997)は“単なる仲間関係に留まらず、より親密な関係³⁹⁾を「友だち」と定義し、対象児を事前にペアリングした上で、友だち関係の形成に関わる要因³⁹⁾と友だち関係の特徴が出現する時期⁴⁰⁾について検討している。その結果、3歳児クラスの時点で、関わり形態や内容において、二者間の親密性による違いが見られた。すなわち友だち同士は二者間での接近した活動が多く、「叙述・質問」を筆頭に「第3者とのトラブルへの介入」「呼びかけ」「笑いの共有」が多く行われたのに対し、それ以外の他児との関わりでは「異議・禁止等」が多く見られた³⁹⁾。さらに友だち間の相互作用の時間的変化について分析した結果、時期を追うごとに一緒に過ごす時間や働きかけの数が増加し、他児との働きかけが減少する傾向がみられた⁴⁰⁾。また相互作用の内容も、「異議・禁止」は少なく、「指示・命令」が減少する傾向にあった⁴⁰⁾。このことから親密な二者関係においては、協同遊びを展開していく上で必要とされるテーマの共有などもスムーズに行われ、遊びが展開しやすくなることが予想される。

実際、二者間の親密性が相互作用に及ぼす影響については“遊び場面や信頼場面において、知っている子よりも友だちに対して好意的な行動をしてくれると予測しやすく、自分も知っている子よりも友だちに対して一貫して好意的に振舞おうと意図する⁴²⁾”というように、他者の行動予測においても確認されている⁴²⁾⁴³⁾⁴⁴⁾。また単に好き／嫌いといった感情だけではなく、幼児なりに他者の行動特徴に基づき、その行動特性のイメージを抱くことで他人認知を行っていることも示唆されている⁴⁵⁾。

さらに二者間の親密性そのものを扱ったものではないが、園生活の仲間関係と降園後の仲間関係との関連を検討した倉持・柴坂(1994)は、幼稚園での仲間関係の変化が降園後の行き来のメンバーを変化させるなど、仲間関係が家庭生活場面に持ち込まれることを報告している⁴⁶⁾。この結果は、幼児にとっての遊びが園の内外によって区切られるものではなく、生活全体を通じて遂行されるものであることを示唆している点でも興味深い。

以上より、幼児は同年齢他者すべてを同一の関係と

認識しているのではなく、関わりの頻度や相手の行動特徴など、日常の様々な経験を通じて、二者間に親密性のある関係を形成していると言える。

では二者間の親密性は、遊び場面における逸脱行動(e. g. ルールを守らない, モノを奪う)など、不快な感情が喚起される場合にも影響を及ぼすのだろうか。中川・山崎(2004)は、幼児の謝罪行動を“罰の回避のために行われ、責任の受容や罪悪感の認識の低い道具的謝罪”⁴¹⁾と、“責任を受容し、罪悪感の認識をした上で行われる真の謝罪”⁴²⁾の2種類に分け、謝罪の種類と親密性との関連を実験により分析している。その結果、“6歳児においては謝罪後の被害者との関係維持を考慮した上で、親密性の低い相手には道具的謝罪を行い、親密性の高い相手には真の謝罪を行う”⁴³⁾ことが明らかとなり、親密度の差が謝罪の種類につながることを示した。またこの他に、対人葛藤場面において使用される方略についても、相手との親密性によって異なることが指摘されている⁴⁷⁾⁴⁸⁾。

しかし分配行動については、二者間の親密度の差による明らかな質的差異は確認されておらず⁴⁹⁾、親密性が遊びを含めた二者間の相互作用に対し、どの程度まで具体的に影響を及ぼすのかについては今後さらに検討すべきであろう。特に仮想実験を用いた研究では、課題状況が実際の相互作用場面で生じた際にも幼児が想像に基づいて回答した通りに行動するかについて十分な検討が行われていない。そのため場の状況、雰囲気、遊びの種類によって相互作用が左右されやすい幼児期においては、課題状況と現実場面での行動の一貫性について推測の域を出ない。さらに先行研究では、事前に選定したペア間に、他とは異なる相互作用や行動の特徴が見られるか否かにより、親密性の有無を判断してきたため、徐々に親密さを増していく過程そのものについては明らかにされていない。よって今後は長期的な観察を併せた総合的な分析により、親密性が形成されていく過程を検討し、親密性の意義について問い直すことが必要である。

B. 遊びが幼児の仲間関係に与える影響

これまで仲間関係が遊びに与える影響という観点から幼児期の仲間関係に関する先行研究を概観してきたが、逆に遊びが仲間関係の形成・維持に影響することも考えられる。しかし仲間関係に関する先行研究が分析場面として遊びを設定するにとどまっているのと同様に、遊びから仲間関係への直接的な関与そのものについての研究はほとんど行われていない。そこで本節

では、幼児期の遊びに関する研究のうち、仲間関係への影響を示唆する先行研究を取り上げることにする。

まず遊び場面が幼児の遊び相手に与える影響について検討する。廣瀬ら(2006)は、屋内外での交渉相手数とその多様性を比較した上で、交渉相手の中で安定した関わりを持つ仲良し同士の屋内外での交渉数を分析している。その結果、“3, 4歳は屋外において遊び相手が流動的に変化するなど、遊び相手の選択は偶発的なものであり、そこにいたかどうかという近接性が最も重要な要因である”⁵⁰⁾のに対し、“5歳では偶発的な相互交渉によって相手と関わるのではなく、遊び相手が興味や関心の類似性によって選択される”⁵⁰⁾ことを明らかにした。

これに対し、ごっこ遊びにおける仲間間のコミュニケーションパターンを分析した小山(1998)は、いつも一緒に遊ぶ仲である子ども同士では、当然のようにいつも遊んでいるテーマに従って遊びを開始し、別の遊びへと移行する際にも自己の役割を主張する発言(e. g. 「私, おねえちゃん」や「やめよー」という言葉によって移行の意思を明確に示すとともに、移行後も変換した役割をスムーズに演じることを報告している⁵¹⁾。このことから小山(1998)は“同じメンバーで繰り返し行っている遊びの中では、成員間で遊びのコンテキストを明確に確認しなくとも遊びを維持できる”⁵¹⁾と指摘している。よってこの結果は、先に検討した仲間入りに関して、子どもの年齢だけではなく、相手との関係性や一緒に遊んだ先行経験によっては、仲間入りの際に「いれて」「いいよ」などの明瞭な方略を必要とせず遊び始めることも可能であるという見解を支持すると言える。

この遊びと子ども同士の関係との関連については、湯沢ら(1991)が5歳児を対象とし、仲間の好きな遊びをどのように推測し、実際の場面においてどのような遊びを提案するかを検討している。その結果、“5歳児は好きな相手については自分と同じ遊びを好むと考え、相手も自分も好きな遊びを提案したのに対し、嫌いな相手については自分の嫌いな遊びや一人遊びを好むと考え、自分も相手も好きではない遊びを提案する”⁵²⁾ことが明らかとなった。さらに湯沢ら(1991)は、社会的地位との関連でも分析を行い、拒否児や無視児の特徴として、仲間の遊びに入れただけでなく、相手と一緒に行うのに適した遊びを提案できないために仲間関係を発展させられない可能性があることを示唆している⁵²⁾。しかし、1人遊びの経験が仲間との相互作用を促すきっかけとなる¹³⁾との知見も提示されているこ

とから、適切な提案が出来ないとされる拒否児や無視児についても、同じ場で遊ぶことを繰り返す中で、“テーマや遊びの内容、遊び始めの合図、ある遊びについてのイメージを仲間同士で了承していけるようになる”⁵¹⁾ことが予想される。

実際、同年齢他者との遊びの開始と継続を可能にするために必要な要素としては、仲間関係の他に、遊び場面⁵⁰⁾、遊びのイメージやテーマを共有するための方略⁵¹⁾、遊びの種類⁵³⁾、特定の言葉⁵⁴⁾⁵⁵⁾⁵⁶⁾⁵⁷⁾⁵⁸⁾、ふざけ行動⁵⁹⁾、動作⁶⁰⁾⁶¹⁾、身体接触⁶²⁾、笑い⁶³⁾が挙げられ、検討されている。このような要素に着目した研究をまとめると、幼児はタブーとされるふざけ行動⁵⁹⁾や笑い⁶³⁾によって、相手との緊張した状況を打破し、新たな関係性を形成する一方で、身体接触⁶²⁾や同じ動きをすること⁶⁰⁾⁶¹⁾で遊びや仲間との繋がりを深めると言える。また遊びにおいて、幼児が他者の興味を喚起するために使用する「みてて」という言葉は、相手との関係が発達するにつれ、単に見せたいモノを指すのではなく、自分の内面をさらけだすために使用されるようになる一方、クラス集団の一員としての意識を持つことにより、「みてて」と呼びかける対象は、保育者などの大人から特定の子どもへ変化した後、不特定多数の子どもへと広がりを見せる⁵⁴⁾⁵⁵⁾⁵⁶⁾⁵⁷⁾⁵⁸⁾ことが明らかにされている。

以上より、幼児は言語や非言語など様々なコミュニケーション手段を使用し、一緒に遊ぶ経験を重ねる中で他者との関係を築くと同時に、その関係の中でその場における相互作用に適した言葉や方略を学び、さらに遊びを発展させていくと言えよう。言い換えるならば、幼児期に対しては、遊びを通して子ども同士の親しさが増し、仲間関係が形成されていく一方、遊び開始以前の相手の好きな遊びについての予測、遊びの開始に向けた提案、その後の遊びにおけるテーマや内容の共通理解に対しては、子ども同士の親しさの程度が影響を及ぼすと言える。よって幼児期における仲間関係と遊びは相互関係にある。そのため仲間とうまく関われない子どもであっても、遊びを支えることで他者との相互作用が改善される可能性は大いにあると考える。

3章 まとめと今後の課題

本稿では、幼児期における同年齢他者との相互作用の中心が遊びであることから、仲間関係と遊びの相互関係を検討することを目的とした。その結果、明らかとなった点は次の通りである。

第一に、仲間関係の質が遊びにおける仲間入りの成否や、仲間入り後の遊びの進行を左右することが明らかとなった。これは他児との相互作用において、使用される方略だけではなく、相手との関係性も重要な要因となることを示すものである。第二の点として、幼児は同年齢他者すべてを同じように認識しているのではなく、遊びなど日常の様々な経験を通じて、親密性のある二者関係を形成することが明らかとなった。特に、遊びへの参加を認めるか否かといった仲間入りの場面や、遊び開始以前の相手の好きな遊びについての予測、遊びの提案、その後の遊びにおけるテーマや内容に関する共通理解において、子ども同士の親しさの程度による質的な差異が生じることが確認された。さらに第三の点として、「拒否児」、「無視児」などと呼ばれてきた子どもたちには、相互作用に必要なスキルや知識が不足しているのではないことが明らかとなり、同じ場で遊ぶ経験を重ねることで、互いに一緒に遊ぶ仲間として認識し始め、関係が形成されていく可能性が示された。以上により、幼児期の仲間関係と遊びは相互に関係し合うことで互いを発達させていくことが明らかとなった。

また、冒頭に提示した図1について次のことが示唆される。すなわち仲間関係の形成には、ある一時点での相互作用だけではなく、個人・二者間・集団それぞれの発達に伴う、相互作用の発展過程も含まれる。また同年齢他者との相互作用だけではなく、遊びや環境、保育者の関わりなどが相互に関連し合うことで仲間関係が形成されていくため、図1は、より包括的なモデルになると考えられる。よって今後、図1をより発展させたモデルの構築に向けて、さらなる検討を進める必要があると言えよう。

最後に、保育実践と幼児期の仲間関係に関する研究について今後の課題を述べることにする。まず保育実践においては、同年齢他者との関わりに困難を覚える幼児であっても、遊びを通じて他児と関わるきっかけが得られることから、その支援にあたっては、関係性そのものだけを問題にするのではなく、遊びそのものを育てることで、仲間入りをはじめとする他児との相互作用を学んでいく場を保障することが重要である。また一人遊びなど、これまで仲間との相互作用においてその意義を見落されてきた点についても問い直す必要があるだろう。さらに協同遊びを行えるなどの具体的な行為だけでなく、子どもの何気ないひと言や行動の中から、子ども同士の繋がりの芽生えを感じ取り、仲間関係の形成を支えていくものであって欲しいと願う。

その一方で幼児期の仲間関係に関する研究においては、第一に、保育園・幼稚園といった環境の違いが結果に及ぼす影響を分析する必要がある。これは対象児の多くが集団活動を始めて経験する幼稚園と、乳児期から既に在園している対象児の多い保育園とでは、仲間関係の形成や相互作用の様相が異なると予想されるためである。また近年、幼保一元化が注目を集め、実施され始めている社会的状況を鑑みても、園の種類や入園年度の違いによる集団経験の差が仲間関係の形成や相互作用にもたらす影響について検討を行うことは重要であろう。第二に、本稿で概観してきたように、仲間関係の形成が幼児の発達に大きな影響を及ぼすことは明らかにされているものの、その相互作用や発達から仲間関係の状態を判断すること(e.g.相手の好きな遊びを予測できるか否かにより、二者間の親密性を判定する)は困難である。その理由は、これまで「仲間関係がどのような発達を促したのか」について検討することで得られた一定の知見をもって「仲間関係とは何か」を語ってきたために、仲間関係の定義そのものについて問い直すことがなかったからではないかと考える。しかし近年、仲間と呼ばれる関係性の中にも親密性による違いがあると認識され始めていることから、今後は仲間関係とそれに関連する発達や遊びなどの双方向的かつ互換可能な検討が望まれる。

(指導教官 秋田喜代美教授)

引用文献

- 1) 松井愛奈 2001 仲間との相互作用のきっかけにおける転換と一貫性—子ども2人の3年間の縦断事例をもとに—保育学研究 39 2 59-65
- 2) 柴坂寿子・倉持清美 1998 園生活の現実としての仲間と仲間文化—ある幼稚園児の事例から— 子ども社会研究 5 109-123
- 3) 斉藤こずゑ 1986 仲間関係 無藤隆・内田伸子・斉藤こずゑ(編)子ども時代を豊かに—新しい保育心理学— 学文社 p.60-61
- 4) 岩田恵子・福田きよみ 1995 3歳児の仲間理解—拒否の発話から—日本教育心理学会第37回総会発表論文集 399
- 5) 謝文慧 1999 新入幼稚園児の友だち関係の形成 発達心理学研究 10 3 199-208
- 6) 原野明子・玄正煥・山崎晃 1991 幼児の相互作用の文脈と仲間関係の発達 日本発達心理学会第2回大会発表論文集 197
- 7) 中澤潤 1992 新入幼稚園児の友人形成：初期相互作用行動、社会認知能力と人気 保育学研究 98-106
- 8) 原野明子 1991 幼児の遊びたい仲間を決める要因に関する研究 日本心理学会第55回大会発表論文集 512
- 9) 謝文慧・山崎晃 2001 3, 4歳男児の友だち集団の特徴：個人行動及び二者関係と優勢順位との関連 発達心理学研究 12 1 24-35
- 10) 森田祥子 2004 乳幼児期の情動調整の発達に関する研究の概観と展望—保育の場を視野に入れた情動調整の発達の理解を目指して— 東京大学大学院教育学研究科紀要 44 181-189
- 11) 倉持清美・柴坂寿子 1996 幼稚園生活を通した子どもの変容—ある問題を抱えた子どもの事例から— 保育学研究 34 2 16-23
- 12) 柴山真琴 1995 ある中国人5歳児の保育園スクリプト獲得過程—事例研究から見えてきたもの— 乳幼児教育学研究 4 47-55
- 13) 畠山美穂・畠山寛・山崎晃 2003 仲間とうまく関われない幼児はどのように社会的スキルを学習するか?—日常の保育場面での遊びや保育者との関わりを通して— 保育学研究 41 1 20-28
- 14) 野尻裕子 2000 幼児にとって相手と「繋がる」ということの意味—うまく「繋がる」ことのできない3歳児の事例から— 保育学研究 38 1 20-27
- 15) 岩田恵子・福田きよみ 1998 幼稚園における4歳児の仲間関係(1)—なかよしになっていくことの意味— 日本発達心理学会第9回大会発表論文集 218
- 16) 伊志嶺美津子・三保美代子・櫃田紋子 1990 乳幼児の社会性の発達に関する縦断的研究—保育園2児の社会的行動— 日本教育心理学会第32回総会発表論文集 28
- 17) 竹森元彦 1991 社会性の発達に関する研究(1)—幼児の仲間関係の発達と保育の集団化に関する研究— 日本発達心理学会第2回大会発表論文集 166
- 18) 田宮縁 2000 事例から見る幼児期の仲間関係と自己形成 保育学研究 38 1 12-19
- 19) 岸千代子・土谷みち子 1991 3歳児の遊ぶ力の発達要因に関する—考察1— 日本発達心理学会第2回大会発表論文集 162
- 20) 土谷みち子・岸千代子 1991 3歳児の遊ぶ力の発達要因に関する—考察2— 日本発達心理学会第2回大会発表論文集 163
- 21) 柴田利男・東敦子 1993 過去の対人経験が幼児の社会的コンピテンスに及ぼす影響 日本教育心理学会第35回総会発表論文集 281
- 22) 佐藤俊人・馬場章信 1988 きょうだい構成が年少児への援助行動に及ぼす影響 日本教育心理学会第30回総会発表論文集 302-303
- 23) 飯島婦佐子 1990 三歳児の対人行動の縦断的研究 日本教育心理学会第32回総会発表論文集 29
- 24) 飯島婦佐子 1991 縦断法による幼児の社会性の分析 日本教育心理学会第33回総会発表論文集 159-160
- 25) 木下芳子・斉藤こずゑ・朝生あけみ 1986 幼児期の仲間同士相互交渉と社会的能力の発達—3歳児におけるいざこざの発生と解決— 埼玉大学紀要教育学部(教育科学) I 35 1-15
- 26) 高濱裕子・堀淳世・堀越紀香・無藤隆・門山陸 1995 3歳児の仲間関係：その形成過程について 日本発達心理学会第6回大会発表論文集 58
- 27) 朝生あけみ・斉藤こずゑ・荻野美佐子 1991 いざこざ場面に

- おける2～3歳児の方略 日本教育心理学会第33回総会発表論文集 93-94
- 28) 倉持清美 1992 幼稚園の中のものをめぐると子ども同士のいざこざ—いざこざで使用される方略と子ども同士の関係— 発達心理学研究 3 1 1-8
- 29) 白石敏行 1992 幼児のコミュニケーション方略が対人問題解決に及ぼす効果 日本発達心理学会第3回大会発表論文集 79
- 30) 山本愛子 1996 遊び集団内における幼児の対人葛藤と対人関係に関する研究—対人葛藤発生原因および解決方略と子ども同士の関係— 幼年教育研究年報 18 77-85
- 31) 丸山(山本)愛子 1999 対人葛藤場面における幼児の社会的認知と社会的問題解決方略に関する発達の研究 教育心理学研究 47 4 451-461
- 32) 倉持清美 1994 就学前児の遊び集団への仲間入り過程 発達心理学研究 5 2 137-144
- 33) 松井愛奈・無藤隆・門山睦 2001 幼児の仲間との相互作用のきっかけ：幼稚園における自由遊び場面の検討 発達心理学研究 12 3 195-205
- 34) 倉持清美・柴坂寿子 1995 幼稚園での対人的評価と仲間入り行動 日本発達心理学会第6回大会発表論文集 59
- 35) 倉持清美・柴坂寿子 1999 クラス集団における幼児間の認識と仲間入り行動 心理学研究 70 4 301-309
- 36) 刑部育子 1994 子どもの「参加」を支える他者—集団における相互作用の関係論的分析— 東京大学教育学部紀要 34 21-30
- 37) 佐木みどり 1995 幼児の日常的行動の発達と保育内容についての実践研究—K夫の仲間入り行動の変容を捉える— 保育学研究 33 1 18-26
- 38) 原野明子 1992 幼児の仲間入り場面における仲間の意図の解釈と方略 広島大学教育学部紀要 第1部(心理学) 41 221-226
- 39) 本郷一夫 1996 「友だち」の形成過程に関する研究(1)—保育所の2～3歳児クラスにおける子ども同士の関係— 日本教育心理学会第38回総会発表論文集 32
- 40) 本郷一夫 1997 「友だち」の形成過程に関する研究(2)—保育所の3歳児クラスにおける子ども同士の関係— 日本発達心理学会第8回大会発表論文集 162
- 41) 中川美和・山崎晃 2004 対人葛藤場面における幼児の謝罪行動と親密性の関連 教育心理学研究 52 2 159-169
- 42) 原孝成 1995 幼児における友だちの行動特性の理解—友だちの行動予測と意図— 心理学研究 65 6 419-427
- 43) 原孝成 1992 幼児における友だちに対する行動の決定 日本発達心理学会第3回大会発表論文集 58
- 44) 原孝成 1994 幼児における友だちの人格特性の理解—個人的関係としての理解— 日本教育心理学会第36回総会発表論文集 55
- 45) 近藤亜希子 1991 幼児の友だちとのかかわり方と対人認知 日本教育心理学会第33回総会発表論文集 161-162
- 46) 倉持清美・柴坂寿子 1994 園生活の仲間関係と降園後の仲間関係 保育学研究 32 36-41
- 47) 山本愛子 1995 幼児の自己主張と対人関係—対人葛藤場面における仲間との親密性および既知性— 心理学研究 66 3 205-212
- 48) 山本愛子 1995 幼児の自己調整能力に関する発達の研究—幼児の対人葛藤場面における自己主張解決方略について— 教育心理学研究 43 1 42-51
- 49) 西村牧子 1996 2人は「仲よし」か否か—その関係性が分配行動に与える影響について— 日本発達心理学会第7回大会発表論文集 39
- 50) 廣瀬聡弥・志澤康弘・日野林俊彦・南徹弘 2006 幼稚園の屋内と屋外の遊び場面における幼児の仲間関係 心理学研究 77 1 40-47
- 51) 小山優子 1998 遊びのコンテクストとしての幼稚園；ごっこ遊びにおける幼児のコミュニケーション的行動の事例分析を通して— 幼年教育研究年報 20 57-64
- 52) 湯沢正通・白川佳子・大山摩希子・石橋尚子・立元真 1991 5歳児による仲間の好きな遊びの推測と遊びの提案 教育心理学研究 39 3 288-297
- 53) 松井愛奈 2001 幼児の仲間への働きかけと遊び場面との関連 教育心理学研究 49 3 285-294
- 54) 福崎淳子 2000 幼稚園新入3歳児の遊び場面における「みてて」発話 保育の実践と研究 5 2 42-59
- 55) 福崎淳子 2001 「みてて」発話からとらえる新入3歳児の他者関係—個別性の視点からの検討— 保育の実践と研究 6 2 14-30
- 56) 福崎淳子 2002 「みてて」発話からとらえる幼児の他者意識—見せたい相手はだれか— 保育学研究 40 1 83-90
- 57) 福崎淳子 2003 幼児の「みてて」発話 見せようとしているモノは何？ 保育の実践と研究 8 2 47-55
- 58) 福崎淳子 2004 幼児の「みてて」発話における自他関係を繋ぐ機能 日本教育心理学会第46回総会発表論文集 24
- 59) 堀越紀香・無藤隆 2000 幼児にとってのふざけ行動の意味—タプーのふざけの変化— 子ども社会研究 6 43-55
- 60) 砂上史子 2000 ごっこ遊びにおける身体とイメージ—イメージの共有として他者と同じ動きをすること— 保育学研究 38 2 41-48
- 61) 砂上史子・無藤隆 2002 幼児の遊びにおける場の共有と身体の動き 保育学研究 40 1 64-74
- 62) 塚崎京子・無藤隆 2004 保育現場における3歳児の身体接触の変容 乳幼児教育学研究 13 13-25
- 63) 堂本真実子 2001 遊びの中での葛藤と笑いの関係 保育の実践と研究 6 1 17-32